

実践のまとめ（第3学年 社会科）

令和3年10月14日（木）第5校時

指導者 小千谷市立小千谷学校

教諭 井上 大輔

1 研究テーマ

事象と事象、事象と生活経験を結びつけて考えをつくる子の育成

2 研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

社会科の目標の1つに、地域社会の一員としての自覚を養う、とある（学習指導要領）。また、「知識及び技能」の項目において、「社会生活についての理解とは、人々が相互に様々な関わりをもちながら生活を営んでいることを理解する」（学習指導要領解説社会編）とある。地域社会とは、子どもたちが現在生活をしている場所を示している。そこでの生活経験をもとに、事象と事象が相互に関わりながら社会を形成していることを理解することが、社会科で求められている。

これまでの私の実践では、子どもたちは学習問題として取り扱う事象に対して自分の考えをつくることはできても、その理由や影響を他の事象とつなげて考える姿は見られなかった。

そこで、身近な地域の社会的事象を教材化し、学習問題に対して生活経験や他の社会的事象をつなげて自分の考えをつくる力を育成することで、社会科の目標に近付くと考え、本研究テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 地域教材の発掘

社会科の教科書には、学習問題として取り扱えば効率よく指導要領の内容をおさえることができる事象が載っている。しかし、自学級の子どもたちの中には、学習問題として取り上げる事象と他の事象との関係や、自分の生活経験と結びつけて考える姿が見られないこともあった。それは、取り上げる事象が教科書の中の世界のもので、自分自身とのつながりがないものだったからだと考える。

そこで、本実践では学習内容をつかむための教材を地域から発掘する。教材が身近なことにより、子どもは学習問題も自分事と捉え、課題解決への意欲が高まるだろう。また、身近な教材・学習問題であることにより、課題解決の際も、生活経験とつなげるようになると考える。

② 既習事項・生活経験をもとにした「予想」と、資料をもとにした「考え」の差別化

社会科の授業で大切にしたいことに、資料の工夫がある。子どもが問題の解決のために、何を必要と感じ、それをもとにどう考えるのかを予想し、資料を選定する必要がある。しかし、子どもが考えるときに早く資料を出し過ぎると、資料からしか考えなくなる。そこで、まず「予想」として資料を出す前に考えをつくる時間をとる。そこで十分に自分の生活経験や前時までの既習内容を想起させることで、子どもは学習問題と、自身の生活経験や既習内容とをつなげて問題解決をすると考える。

(3) 研究テーマにかかわる評価

前単元のノートの記述を分析し、考えを作る際に他の事象のことや、自身の生活経験が理由に記述されている人数（割合）を把握する。その後、本単元を学習していく中で、それらの数字がどう推移していくかを観察し、分析する。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

事故や事件から小千谷を守る（小学社会3 教育出版）

(2) 単元の目標

警察の普段の仕事や事故・事件が起こったときの働きについて調べることを通して、警察署が中心となって関係機関や地域の人々と相互に連携して地域の安全を守る体制をとっていることを理解し、自分も地域社会の一員として、事故や事件がない安全なまちづくりのためにできることをしようという態度を育む。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
警察署が中心となって関係機関や地域の人々と相互に連携して地域の安全を守る体制をとっていることを理解している。	警察署や見守りボランティアの活動を調べ、役割の違いや関係を文章で記述している。	地域社会の一員としての自覚をもち、事故・事件の無い安全なまちづくりのために何ができるか考えている。

(4) 単元と児童

3学年は4クラスで、129名である。クラス替えがあり、4月から新クラスとしてスタートした。そのため、まだ児童間の関係は浅く、関係づくりをしている段階である。授業でもその傾向が見られ、発言に積極的な一部の児童は挙手をするが、そうでない児童は考えがノートに書いていても、自分から手を挙げることは少ない。机間指導で声をかけたり、指名したりして発言させてきた。

社会科の単元「スーパーマーケットのひみつ」では、店に品物がどのように届いているかを考えた。「飛行機」や「船」とノートに書く児童がおり、他の児童もその意見に納得するような場面があった。そこで、「(学校の近くの)〇〇にも、飛行機や船で品物が届いているのかな？」と問うことで、ようやくトラックで運ばれてきていると考えたり、「見たことがある」と生活経験とつなげたりすることができた。

本単元は、大単元「地域の安全を守る」の中の小単元である。本単元で取り扱う警察署は、学区の中にあり、なじみのある児童もいるだろう。その警察署の方にお話を聞いたり、ガードレールや標識など地域の交通安全施設を調べたりしていくことで、警察署が中心となって事故や事件から地域の安全を守っていることをつかませていく。またその過程で、病院消防車などの関係機関、登校を見守ってくれているボランティアにも目を向けさせていき、警察だけでなく関係機関や地域住民など、地域が一体となって安全を守っていることに気付かせていく。

(5) 単元の指導計画と評価計画（全11時間、本時5／11時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法 (評価方法は【 】内で記述する。)
1 (3)	・小千谷市の交通事故	◎小千谷市の交通事故はどのくらい起きているのか調べる。	知・技 交通事故や警察署の施設、緊急時への備えや対応について調べることをとおして、関係機関や地域の人々の諸活動を理解している。 主体的に学習に取り組む態度 交通事故や事件について予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追求し、解決しようとしている。 【ノート記述分析】
2 (5)	・交通事故を起こさせないための取組	◎交通事故が起きないように、どんなことをしているのか調べる。	思考・判断・表現 警察署の施設や緊急時への対応などに着目して、問いを見だし、関係機関や地域の人々の諸活動について考え表現している。 主体的に学習に取り組む態度 事故や事件から地域の安全を守る働きについて予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追求し、解決しようとしている。 【ノート記述分析】
3 (3)	・交通事故を防ぐために自分にできること	◎交通事故が起きないように、どんなことができるか考える。	主体的に学習に取り組む態度 交通事故が起きないようにするために、自分にできることを考え実践しようとしている。 【ノート記述分析】

4 本時の展開

(1) ねらい

町には交通事故防止のための施設がたくさんあることを理解し、それらは見通しの悪い曲がり角や狭い道、通学路など、事故が起こりやすい場所に設置されていることが分かる。

(2) 展開の構想

子どもたちは前時に、警察官の方にどのような仕事をしているか、交通事故防止に向けてどのような取組をしているかを聞く活動に取り組んでいる。本時では、町にある交通事故防止の施設について想起させ、カーブミラーや信号など、交通事故を防止するための施設や工夫がたくさんあることを確認する。その後、学校の近くの交差点の写真を提示し、生活経験と結び付けながら、交通事故を防止するための施設や工夫が、必要な箇所や危険な場所に設置されていることに気付かせていく。

(3) 展開

時間 (分)	・学習活動	○教師の働き掛け ●予想される児童の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
5分	・警察署がどんな活動をしているのか振り返る。	○警察署は交通事故を防ぐために、どんな活動に取り組んでいるのですか。 ●パトロール ●交通安全教室	○掲示物等で、前時までの学習を想起させる。

10分	<p>・地域の交通事故防止の施設について考える。</p>	<p>○町の中には、事故防止のためのどんな工夫があるでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●カーブミラー ●看板 ●歩行者用信号 	<p>○小千谷市のいろいろな交通事故防止の施設を想起させる。【手立て①】</p>
25分	<p>◎町には、交通事故を防ぐために、どこに、どんな工夫がしてあるかな。</p>		
	<p>・交通事故防止の施設が、どこに置かれているか考える。</p>	<p>○それらの工夫は、それぞれどんなところにあるのかな。予想を書いてみましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●カーブミラーは、曲がり角にあるよ。 ●でも、すべての曲がり角にあるわけじゃないよね。 ●見えにくい曲がり角にあるんだと思うよ。 ●「スピード落とせ」の看板は、どこにあったかな。 <p>○町の様子を見て、考えを書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●見通しが悪い曲がり角にカーブミラーがあるぞ。 ●「スピード落とせ」のかんばんは、下り坂側にしかないんだな。 	<p>○資料配布前に、学習問題について生活経験や既習事項とのつなげて考える時間の確保。【手立て②】</p> <p><input type="checkbox"/>交通事故防止のための施設やそれが置かれている場所などを、書くことができる。</p> <p>○写真資料を配布する。</p> <p><input type="checkbox"/>友達の考えや資料から、交通事故防止のための施設がどのような場所に設置されているか、自分の考えを書くことができる。</p>
<p>まとめ：見通しが悪いところや、スピードが出てしまいそうなど、事故が起きそうなところに、交通事故防止の工夫がしてある。</p>			
5分	<p>・振り返りを書く。</p>	<p>○今日の振り返りを書きましょう。</p>	

(4) 評価

本時の評価については、授業後にノートを回収し、記述を分析することで評価する。評価の観点については、(3)展開にある通りである。

基準については、以下の通りとする。

A：既習内容や生活経験とつなげて自分の考えを書くことができた。

B：自分の考えを意味の通る文章で書くことができた。

C：B未満

5 実践を振り返って

(1) 授業の実際

単元の導入～本時 ※手立て①

本小単元は、小千谷市の交通事故の件数について調べることからスタートした。レディネス調査の結果、子どもたちは小千谷市を「平和」だと考えており、その子どもたちに小千谷市の交通事故の件数を予想させると、少ない件数を予想する子どもが多かった。そこで、昨年度1年間の交通事故の件数や死亡事故の件数などを資料で提示した。子どもたちの「平和だと思っていた小千谷市」という意識を、「50件を超える交通事故や、死亡事故が起きている」という事実で揺さぶることで、追意欲を喚起した。

その後、調べていく中で分からないことやはっきりしないことが出てきたので、実際に小千谷警察署の方に来ていただき、お話を聞いたり、装備品を見たり、パトロールカーに乗せてもらったりした。

本時導入～追求 ※手立て①②

本時では、警察が様々な工夫をして交通事故から守ってくれていることを確認した後、他にも交通事故から地域の人を守る工夫があるか聞くと「ある！」ということが多数聞こえたので、学習問題「◎交通事故をふせぐために、どこにどんな工夫があるかな」を設定した。子どもたちは予想で、カーブミラーや道路標識など、様々な意見を出した。意見を出し終わったところで、教師が「他にもありそう？」と問うと、子どもは「ありそう」と答えた。そこで教師が「何があれば考えられる？」と聞くと、子どもから「また警察に聞く」や「行ってみる」等の答えが返ってきた。そこで教師が「行ってみるってことは、見ればわかるってこと？」と聞き、子どもが頷いたところで、教師が「写真あるけど、見る？」と問うと、子どもから頷きや「見る！見る！」と言うなど反応があったので、写真を配布した。

配布した写真は、町探検でも通った学校の近くの交差点を教材として取り上げた。グーグルマップを活用し、実際に学校から取り上げる交差点までストリートビューで示した。画面上でその場所に着くと、子どもから「ここか～」などの声が聞こえた。その場所の写真を配布し、考えを書かせた。

追求～まとめ

考える時間をとった後、子どもに考えを発表させた。横断歩道という意見の後に、ある児童が車止めのポールを発表した。すると他の児童が「反射テープが巻かれている」と発言し、教師が「何のため？」と問うと、多くの子どもたちが「暗くても見えるようにするため」という内容のことを口々に答えた。さらに、横断歩道の上のスピーカーを見つけた子どもが発表した。そこで、青信号の時に音が流れることを確認し、教師が「信号だけで分かるのに、どうして音を流す必要があるの？」と問うと、「目が見えない人のため」という声があり、「点字ブロックもあるよ」と続く子どもたちがでてきた。そこで、「交差点には、昼でも夜でも、目が見えない人でもみんなを守るくふうがたくさんある」とまとめ、振り返りを書かせて授業を終了した。

(2) 研究テーマに関わって

前単元の中で考える際に始めから資料を提示して学習を展開した授業と本時とで、児童の記述を分析した。結果は以下の通りである。

項 目	前単元	本時
	人 (%)	人 (%)
資料から記述している児童	23 (79)	16 (50)
生活経験や他の社会的事象とつなげて記述している児童	5 (17)	26 (81)
無記述	1 (4)	6 (16)

※本時は、資料と、生活経験や他の社会的事象と、両方から記述した児童がいたため、両方の項目に数えられ、割合の数値が100%を超えている。

初めから資料を提示した前単元の授業では、生活経験や他の社会的事象とつなげて記述した児童は5人(17%)であった。それに対し、本時では生活経験や他の社会的事象とつなげて記述する姿が多く見られた。A児は学習問題に対し「城川郵便局の道路をちょっと行ったところに止まれがあって夜に光る。」と記述しており、「交差点」という社会的事象と、「近所の交差点」という生活経験をつなげて考えていたことが分かる。このように自分の生活経験とつなげて考えていた児童が26人(81%)にのぼった。これは、大きな成果であり、手立ての有効性を示していると考えられる。地域を教材として取り上げることで学習問題と自分につながりを作り、資料提示前に予想を書かせる時間を確保することで、自分の生活経験や他の社会的事象と学習問題のつながりに気づき、表現する。この過程を踏むことで、事象と事象、事象と生活経験を結びつけて考えをつくるようになることが分かった。

(3) 今後の課題

生活経験や他の社会的事象とつなげて記述した児童が増えた一方で、資料から考えを書くことができた児童が50%にとどまった。その原因は2つあると考える。1つ目は、記述する時間を2段階に分けたことで、時間を確保することができなかったことである。資料と向き合い、考えを書く時間が減ったため、資料から記述する児童は減ってしまった。2つ目は、学習問題に対し、資料の内容が不十分だったことである。本時では学校の近くの交差点を教材化したが、学習問題に対し、提示資料がすべての児童の解決の糸口として機能するように、内容を精査しなければならない。

今後は、以上の2点を改善し、学習問題を生活経験や他の社会的事象だけでなく、資料ともつなげて記述する児童を増やしていく。

6 参考文献

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』(2017)
- ・澤井陽介『小学校 新学習指導要領 社会の授業づくり』明治図書(2018)
- ・櫻井茂男『自ら学ぶ子ども 4つの心理的欲求を満たして学習意欲をはぐくむ』図書文化(2019)